

「ノダ」構文に対応・応対する中国語の表現
—書き言葉の調査を中心に—

「一橋大学審査博士学位論文」

2022年9月30日

一橋大学大学院言語社会研究科

博士後期課程

LD162002

王雪竹

要旨

本論文では日本語が原作の一般教養類書籍とそれらの中国語訳本、中国語が原作の一般教養類書籍と日本語訳本を用いて、日本語の「のだ」が中国語においてどのような対応表現があるかを考察した。

本論文の章立てと各章の内容は以下のようである。

第一部

序章

第1章 先行研究および本論文の立場

第2章 日本語と中国語における「関連付け」の言語形式の使用差比較

第二部

第3章 「理由・解釈」の「のだ」に対応する中国語

第4章 「言い換え」の「のだ」に対応する中国語

第5章 「発見・再認識」の「のだ」に対応する中国語

第6章 「前置き・先触れ」の「のだ」に対応する中国語

第7章 「命令・認識強要」の「のだ」に対応する中国語

第三部

第8章 「のだ」と“是…的”の対応性について

第9章 スコープの「のだ」について

第10章 本論文のまとめと今後の課題

【序章】

序章では本論文の考察対象と目的、考察方法について述べている。本論文の出発点は、外国人日本語学習者の視点から見て「のだ」はどのように理解すれば良いのかということである。そのため、日本語における「のだ」の記述(キーワード:「関連付け」と「スコープ」)を基に、その記述は中国語の表現としてどのように反映されているのかを中心に考察している。考察方法は、書き言葉から着手し、「日本語原作→中国語訳本」、「中国語原作→日本語訳本」の中から、「のだ」が使われているところの中国語訳を考察する。書き言葉で網羅できない、もしくは反映されていない「のだ」に使い方に関しては『日本語話し言葉コーパス』の例文や作例を使って、中国語の訳を考察する形を取る。

【第1章】

第1章では先行研究と本論文の立場を述べている。本論文の立場としては、庵他(2001)における「のだ」の7つの機能類別(「理由・解釈」、「言い換え」、「発見」、「再認識」、「先触れ」、「前置き」、「命令・認識強要」)を5つ(「理由・解釈」、「言い換え」、「発見・再認識」、「先触れ・前置き」、「命令・認識強要」)にまとめて対応表現を考察する。考察は、各章ごとに一つの類別が対応する中国語表現を割り出す形である。

【第2章】

第2章では「のだ」の考察に入る前に、「関連付け」という概念に対して、日本語と中国語はそれぞれどのような表現があるのか、対応関係がどのようになっているのかについて述べ、概観を把握する。その際、関連付けを表す「理由・解釈」、「言い換え」、「発見・再認識」、「先触れ・前置き」、「命令・認識強要」は日本語と中国語において使用頻度に差があるかどうかの考察も行う。考察結果は表1のようにある。

表1 日本語と中国語の文章における各機能用語の使用頻度の差

	日本語原作と中国語訳本の比較	中国語原作と日本語訳本の比較	日本語原作と中国語原作の比較	結論
理由・解釈	○	○	○	使用頻度に差がある (日本語の方が高い)
言い換え	○	○	○	使用頻度に差がある (日本語の方が高い)
発見・再認識	○	○	○	使用頻度に差がある (中国語の方が高い)
前置き・先触れ	-	-	-	-
命令・認識強要	○	×	×	使用頻度に差がない

○：使用頻度に差があり ×：使用頻度に差がない -：考察結果なし

【第3章】

第3章では、「理由・解釈」の「のだ」に対応する中国語について考察している。対訳状況の結論は次のようである。

- <1>1節の調査結果から、「理由・解釈」の「のだ」は中国語において言語形式として訳されるのは約1割しかないことが分かった。
- <2>訳されない理由については、第2章の考察と合わせて考えると、「理由・解釈」の論理関係は中国語においてもともと言語形式を用いないで表現することが多いからと考えられる。
- <3>訳される1割の中で、対訳の種類が最も多いのが原因・理由を表す“因为”、“所以”の

ような「原因・理由」系の表現である。つまり、「のだ」が「理由・解釈」として働く時、中国語に訳されても同じく、典型的な「理由・解釈」の表現になる。

〈4〉対応・応対表現の種類として、“因为”、“所以”といった原因・理由系の表現の他に、目的を解説する「のため」系、原因・状況を解説する“是/是…的”系、解説機能のある記号系がある。その他に、理由・解釈の機能が核心でないものの、事態の時間的・空間的な継起を示すことによって推論の証拠を提示し、事柄が生じた理由・結果を示す順接系、推測系の表現も対応・応対形式として使われている。

〈5〉あらゆる対応・応対表現を類別的に見ると、「理由・解釈」といったプロトタイプの意味から、異なるルートを経て大まか二種類の周辺的な対訳に発散していることが分かる。ルート1は、「理由・解釈」の事柄に対する解説性をスキーマに発散していくルートで、ルート2は「理由・解釈」の前件から後件への推論関係、論理関係をスキーマに発散していくルートである。そして数から見ると、約7割と3割の比率である。

【第4章】

第4章では「言い換え」の「のだ」に対応する中国語について考察している。対訳状況の結論は次のようである。

「言い換え」という用法はもともと多義的であるため、その機能を果たす「のだ」に対応する中国語も様々なバリエーションを呈している。しかし、これらのバリエーションは乱雑で無関係なものではなく、「言い換え」という言語が本来持っている種類とそれらの定義に従っており、そして収まっているのである。今回の考察の結果として、「言い換え」の「のだ」の対応形式として、「言い換え」の6種類の中の3種類、“推论关系(推論関係)”、“解证关系(解説・証明関係)”、“定义关系(定義的關係)”に属する形式が観察された。対応関係を図にすると次のようになる。

【第5章】

第5章では「発見・再認識」の「のだ」に対応する中国語について考察している。結論としては次のようである。

「発見・再認識」の「のだ」は「理由・解釈」の「のだ」と同根で、意味的には因果関係を表すものであるが、因果関係の上に「その場で初めて気づいた／その場で初めて思い出した」との条件が加わってから成り立った用法になる。「その場で初めて気づいた／その場で初めて思い出した」という条件は「発見・再認識」の「のだ」を成立させる最も際立つものであるため、「発見・再認識」に対応する中国語もこの条件が語彙的に含まれていなければならない。従って、「発見・再認識」の「のだ」に対応する中国語は広義的な因果関係を表す表現に「その場で初めて気づいた／その場で初めて思い出した」という気づき性が語彙的に含まれる表現である。このような表現は、本調査で見つかった形式として“原来(…啊)(～だったのか)”、“竟然(まさか～だったのか)”、“看来(～から見ると～だったのだ)”がある。

なお、本調査で出てこなかった表現としては、その他に、“原来…啊”の類似語“敢情…啊”、“合着…啊”、“竟然”の類似語“居然”、“看来”の派生語“如此看来(こうして見ると～だったのだ)”があると考えられる。

【第6章】

第6章では「前置き・先触れ」の「のだ」に対応する中国語について考察している。結論としては次のようである。

書籍から調査した結果、実例から得られた「前置き・先触れ」の「のだ」の対応形式は“是……的”構文の否定形の“不是……的”があった。

「前置き・先触れ」の「のだ」の本質は本来の「のだ」の関連づけの順番を逆にすることによって興味喚起などといった特殊の効果を果たすことにある。そのため、理論上「前置き・先触れ」の「のだ」に対応する中国語も、もとの文の順番を逆にしても自然である形式のほずである。このような形式な、基本的に「理由・解釈」の「のだ」に含まれる。このような考え方に基づいて実例を検討した結果、「前置き・先触れ」の「のだ」に対応し得る形式は以下のものがある。

【推測系】

我认为(～だと思う)

据说(～だと言われている)

【第7章】

第7章では「命令・認識強要」の「のだ」に対応する中国語について考察している。対訳状況の結論は次のようである。

「命令・認識強要」の「のだ」は、相手に自分の判断を押し付けるものであり、理由を言わずに結果だけ受け入れてもらいたい場合が多く見られる。そういった意味でいうと、「命令・認識強要」の「のだ」は、「理由・解釈」、「言い換え」、「発見・再認識」、「前置き・先触れ」の「のだ」とは独立した存在である。ただし、「命令・認識強要」という感情はもともと対人的な文章使いにおいて多く使用されるものではない。そのため、やや特殊な用法になる。このことは、上述した5つの用法の頻度さからも分かる。

調査から得られた「命令・認識強要」の「のだ」の対応形式は以下のようになる。

【モダリティ助詞系】

居然(まさか～だ)

真(本当に～なのだ)

啊(～のだ)

绝对(絶対～)

一定(絶対、必ず～)

真(本当に～なのだ)

【“是/“是…的”系】

是(～だ)

【“就”系】

就是(～でないならそれまでだ、こそ、するやいなや)

【記号系】

“！”

【その他】

到底(一体～)

【第8章】

第3～7章から、「のだ」に対応する中国語の表現がたくさんあることが分かった。本章ではその中の対応形式の一つ、そしてそれも先行研究で最も論じられてきた「のだ」と中国語の“是…的”の対応性について再び検討する。検討した結果以下のようなものである。

- 〈1〉「のだ」の「の」は、準体句の消失とその性質を保つために要求された形式上の成分である。準体助詞の「の」のは代名詞の「の」から由来し、活用言を名詞化する機能である。
- 〈2〉「のだ」の「だ」は連体なりの意味を継承している。「の」と「だ」の併用は、日本語の形態上の束縛が大きな要因になっている。
- 〈3〉「のだ」の成立初期の使い方は、形態上の束縛に大きく左右される。もとである準体句は、ヒト、モノ、コトガラのいずれも表せるため、「のだ」の前接成分は制限なく広い意味合いを表せる。
- 〈4〉“是…的”は「のだ」と異なり、形態的な束縛から由来したものではない。
- 〈5〉“是…的”の“的”は、代名詞から発達した前文脈との照応を示すものである。
- 〈6〉“是…的”の“是”は、論理性や指示の明示性を示すための成分である。そのため、“是…的”構文全体の意味が単一であり、「説明」という意味合いが強い。

「のだ」と“是…的”の相違は、膠着語と孤立語の構成の差を反映したものかもしれない。形式上似たもの同士でも、構成の違いで機能が大きく異なってくる(無論異なるばかりではなく、一部重なる可能性もある)。特に対照研究では、真相を突き止めるためには、表層形式に左右されないことを心がける必要があると考える。

【第9章】

第9章では、関連付けの機能とは別に、「のだ」に関するもう一つの視点、「スコープの「のだ」」の中国語対応表現について考察している。結論としては、スコープの「のだ」はムードの「のだ」と完全に独立するわけではない。そのため、対応形式を考察する観点から考えると、「のだ」をスコープとムードにあえて分ける必要は必ずしもない。

しかしスコープの「のだ」の中、「～のではなく、～のだ」と実質的に「のか」を意味す

る「のだ」という統語的にスコープの特徴がはっきりしている「のだ」がある。その2つの対応形式に規則があるかという点、「～のではなく、～のだ」の方は、今回の調査結果では、中国語の中で指示範囲を明示する“是”、そして「～ではなく、～のだ」の直訳“不是～，而是～”が唯一の対応形式になっている。これは、「～ではなく、～のだ」のスコープ性の強さを反映した結果とも考えられる。一方、実質的に「のか」の「のだ」は、中国語の対訳では通常の疑問文の形式と融合されやすいのと同時に、「～ではなく、～のだ」よりムード性が高い場合が多いため、スコープの機能だけを表す対応形式は見つからなかった。

【第10章】

第10章では前の章の内容をまとめた上で、今後の課題について述べている。